



一九八九年、伊東はまさに「時の人」であった。すなわち、同年四月末、リクルート疑惑に端を発する政治不信の嵐に直撃され、竹下登首相が退陣表明を余儀なくされた後、清廉な政治家として知られた伊東は、竹下後継の総理・総裁候補として一躍注目されたものの、「本の表紙だけ変えても、中身が変わらなければダメだ」という一言で固辞。「総理大臣のイスを蹴った」稀有な政治家として名を遺した。

その伊東は、天安門事件の発生を契機に外交においても「時の人」になる。当時、伊東は自民党の有力政治家の中でも突出した親中国派として知られており、日中友好議員連盟の会長であった。伊東と中国との関係は古い。一九三〇年代、農林省に入省した頃の頃、大蔵省の大平正芳と知り合った伊東は、日中戦争勃発を機に対中政策を調整する機関である興亜院に共に出向し、その後二人は戦後の政界で盟友となった。七二年の日中国交正常化に外相として尽力した大平が首相在任中に急逝した後も、伊東は亡き盟友の遺志を引き継ぎ、毎年のように中国を訪れ、同国要人との間に太いパイプを築いた。

## 事実上の政府特使として訪中

天安門事件の三日後の六月七日午前、伊東は、日中友好

議員連盟緊急理事会の場にいた。外務省アジア局の谷野作太郎審議官（六月下旬からアジア局長）による状況説明の後、連盟の決議案に関する所属議員たちの意見が示された。中国課が作成したこの時の議事録を読むと、確かに、中国に制裁を課す欧米諸国と距離を置くべきだという意見や、決議案の文面が「中国政府を批判している」ととられないか？」といった過剰な配慮も少なくなかった。しかしその一方で、今回の事件で日本国民が受けた衝撃に鑑み、「人道問題から強く反省を促した方が良いと思う。……許される行為としてこの際断言していただきたい」「言うべきことは言うべき」といった、より強い対応を支持する意見も相当有力であった。

全体の意見が一通り出された後、会長の伊東は、「人道的見地からはなはだ遺憾」「平和的手段によって局面の收拾を図り」という二点の文言を決議案に盛り込む裁断をする。そのうえで、同日午後の楊振亜駐日大使への決議案申し入れの際、「大使にもっと強く言うつもりである」と結んだ。彼自身が、「真の友人はこういう時こそ注意するのが本当だ」と考えていたのである。

それから三ヵ月後の九月一七―一九日、伊東は日中友好議員連盟の議員らを引き連れ、中国を訪問した。事件に関



1989年9月19日、北京の人民大会堂で会談する伊東正義日中友好議員連盟会長（左）と鄧小平中国中央軍事委主席（AFP=時事）

する日本の強い懸念を、鄧小平など中国側要人に直接伝える役目として、連盟会長の伊東に白羽の矢が立ったのである。事実上の政府特使であった。しかし、伊東は中国への強い憤りから訪中に消極的であった。それでも、外務省の谷野アジア局長の強い説得もあり、重い腰を上げた。

### 伊東の直言にもしたたかだった中国

一七日夕方、伊東一行は、遼寧省の瀋陽にある遼寧友誼会館で、李鵬首相との約二時間にわたる会見に臨んだ。李鵬は、瀋陽まで駆け付けた一行に対し謝意を示し、歓迎の意向を表明した。これに対し、伊東は、「今回の訪中は気が重かった」と切り出し、「六月四日事件をテレビで見ても大きなショックを受けたからである。日中友好に努力した者としては特にそうであり、中国が国際的信用を傷つけたことは事実である」と言明した。弾圧の中心人物と目される李鵬に対して歯を衣を着せぬ発言ぶりである。

伊東の直言に対し、李鵬は「今回の暴乱は、民主・自由、胡耀邦の追悼に名を借りて、実際には中国の政府・党の指導を転覆させようとするもので問題であった」と断言。そればかりか、民主化運動に理解を示し失脚をした趙紫陽に事態悪化の責任を転嫁した。これに対し伊東は、「この事

件のために、日本ではショックを受け、世界の中で中国の信用がダメージを受けた」と押し返す。そのうえで、「冷却化している日中関係を元に戻すには、中国側で何らかの手段を講じてもらいたい」として、中国がその種の措置を講じることで、「竹下元総理が約束した（第三次）円借款の八一〇〇億円」の実行が可能になると論じた。

伊東の発言を受けても、李鵬は自国の対応の正当性を主張し続けた。会見の最後に、「今回の事件で人民の不满をくみ取り教訓にしたい」と発言したあたりが、唯一の反省のシグナルであった。その一方で、「西側の対中封鎖を打破する点において日本は大きな役割を果たすであろう」と指摘しつつ、「世界は大きく、必ず友人が見つかる」として、「米国も一方で制裁をし、他方で仲良くしたいとシグナルを送ってくる」と意味深長な発言をした。

米国に関する李鵬の発言は、六月二〇日、米国政府が、政府間の高位レベル交流の全面停止を含む「第二次制裁」に踏み切っておきながら、七月一日にスコウクロフト大統領補佐官（安全保障担当）が極秘訪中を行っていたことを示唆するものであった。この件が明るみになるのはその年の一二月のことであるが、米中接近の可能性を示唆しながら、日本に「中国との関係改善で米国に遅れて良いのか」

と牽制し、日本を焦らせることで、「西側の対中封鎖を打破」しようとする中国側のしたたかな狙いが見て取れる。

李鵬に続き、一八日から一九日にかけては北京において、伊東一行は、鄧小平中央軍事委員会主席をはじめ、江沢民総書記、呉学謙副総理など要人との会見を重ねた。特に、中国政情がなおも不安定な状況のなかで、鄧小平主席が外国の政治家と会談したのは、五月に訪中したゴルバチョフ書記長以来、天安門事件後では初めてのことである点に、日本の外務省も、「今次一行に寄せる中国側の意欲と関心を示すもの」と注目した。

まず、趙紫陽の後任の総書記となつて間もない江沢民は、「御高名はかねがね伺っております。中国には『雷鳴が耳元で響くほど名前をよく聞いている』という諺があります」と語り、伊東を持ち上げた。そして、第三次円借款再開の言質を引き出すべく、改革・開放政策の継続を精一杯強調してみせた。しかし、「鎮庄に対する（外国の）非難は許されない」とも述べ、あくまで武力行使を正当化した。

また、最高実力者・鄧小平も、「中国は制裁を恐れない。制裁による損失は、いつか制裁者自身に跳ね返る」と強調し、西側の制裁には屈しない意思を伊東に伝えた。さらに、「（日本は）人権を振り回す欧米とは違はずだ」「日本は

自分たちの苦境を分かってくれるはずだ」と牽制してきた。しかし伊東は鄧に對し、「中国はこの際、国際社会の信頼を取り戻してほしい。そのために中国が目に見える形で行動してほしい」と、日本側の強い憂慮や苦言を伝えている。それでも、帰国した伊東は、中国の改革・開放政策と対日友好路線に変化はないとして、日本の対中政策もこれまでの路線を維持すべきと主張したという。

## もう一人の親中派硬骨漢 橋本恕中国大使

しかし、伊東訪中後、日本政府はただちに対中関係改善に踏み切ったわけではなかった（関係改善に本格的に着手するのは、一九九〇年一月の北京の戒嚴令解除以降）。

一月一日、呉学謙副総理が橋本恕中国大使に對し、直近に日中経済協会が訪中団（団長は斎藤英四郎経団連会長）を派遣したことなどに言及しつつ、「先般の伊東先生の訪中をきっかけに、中日間の民間交流は回復した」としながらも、「民間の積極的動きに、日本政府が遅れをとらないようにしてほしい」と要求した。ちなみに、李鵬首相は上記の日中経済協会の訪中団に對し、西欧諸国と中国との経済関係が進展していることを引き合いに出しながら、第三次円借款の再開を強く懇願していた。

これに對し橋本大使は第三次円借款や高官往来が再開できない理由として、①日本国民の中に、六月の天安門事件に関連して中国に對する批判的意見が少なからず存在すること、②日本には日中友好の政策とともに、西側の一員であるとの基本政策があり、他の西側諸国の意向を考慮に入れる必要がある、という二点を挙げ、「問題解決には時間がかかる。多少の時間を与えてほしい」と発言した。この発言を受け、呉学謙も、「橋本大使が積極的立場をもって述べられた意見に賛同する」として、橋本の見解に理解を示した。

七二年の日中国交正常化で外務省中国課長として活躍した橋本は、中国大使としても、九二年の天皇訪中の実現に積極的に動くなど、伊東と同様、天安門事件後の日中関係の改善に尽力する人物である。しかし、これまた伊東と同様、親中国派でありながら、日本独自の立場を臆せず中国首脳に伝えるということも決して忘れない、国士タイプの外交官であった。とかく近年、親中国派に「中国ベッタリ」というネガティブなイメージが定着している感があるが、一次史料を紐解くと、そのステレオタイプなイメージは必ずしも正しくないということを学ぶことができる。万事先入観で物事を見るのは危険である。●